

第15回 許我篆書展出品者目録 (敬称略・五十音順)

テーマ「川^{かわ}蟬^{せみ}」「翡^{かわ}翠^{せみ}」「魚^{かわ}狗^{せみ}」 ※ 漢字は自由選択

作家名

作品イメージ

あかひら たいしよ
赤平 泰処

自然の中に生きる川蟬の強く美しい姿に共感するものが多い。
我が書にもそのイメージを広げたいと思い筆を執った。

いがき せいめい
井垣 清明

サトウハチロー作詞・中田喜直作曲の歌。
たぬきのね たぬきのね ぼうやがね
おなかにしもやけ できたとき
わらいかわせみに 話すなよ
ケララ ケラケラ ケケラケラと
うるさいぞ
思い出しながら「当たり前」を心がけた。

いしざか まさひこ
石坂 雅彦

古代感を出したく絵に近い古い金文を用いた。
書いている時はお絵描きのようで楽しいが、作品となるとなかなか納得いかない。

いのうえ しゅうか
井上 秀花

「かわせみ」よく耳にする鳥名でしたが、本当にこんな宝石の様な鳥とは！
この羽色の美しさ、俊敏さ、強さ等を線の中に表現できたら幸せと試みてみましたが……

いば えいはく
伊場 英白

色彩が鮮やかで凛とした姿の川蟬を思い爽快に表現したかった。

うしくぼ ごじゅう
牛窪 梧十

カワセミのイメージを、色の鮮やかさ、嘴の存在感、動きの敏捷さなどと把握した結果が、
この作品となりました。

おおいし りくでん
大石 六田

私は最近ユーチューブで、癒しの音楽と共に“造化の美”の極致と言って良い大自然に生きる鳥、魚、花等の映像を楽しんでいる。
その美しさには、只々驚嘆するばかりで、人造の美の遠く及ばぬ美しさであると感心する。
「川蟬」の美しさも“見事”の一言に尽きる。とても筆では表現できないと思った。

おおやま くはち
大山 九八

「川蟬・翡翠・魚狗」の三種の課題に挑戦。それぞれに魅力あり制作はより楽しめた。秦篆
のカトリシティなる格調を乱さぬよう、孫過庭の「骨気適潤」を心掛けて静寂平凡なフォルム
追求。私^{ひそ}かにそれなりの風格を狙った……

おかのや こういち
岡野屋 宏一

空間を意識し、重心を左上から右下にかけて移動させる構図とした。かわせみが獲物を狙う
あのスピード感。そしてすっとたたずむあのありよう。動と静とをここにあらわす試み。

かわち くんべい
河内 君平

唐宋時代の宮中では、翡翠の羽毛が装飾品に享用された。青さ、華やかさ、軽さ、透明感が好まれたからであろう。また長いクチバシを持つ姿も優雅である。このようなカワセミの特性と姿をイメージして書いてみました。

こはら どうじょう
小原 道城

川蟬は私の故郷・栗山の川にも生息していました。私は水墨画でよく川蟬を描いたものです。とても絵になる鳥で、まさに“空飛ぶ宝石”です。金文で表現しました。清流を自由に飛びまわるイメージにしたかったのです。

さがわ ろしゅう
佐川 蘆州

線の太さや文字中の間隔、更には左右対称等に意を配し、重量感を出すために太めの筆を用いました。

さとう ようさい
佐藤 容齋

鳥としての「川蟬」の視覚的なイメージにはこだわらず篆体としての調和に専念しました。筆圧の強弱や墨の潤濁をつけることで変化と流れを出し、篆書の規範から一歩抜け出した自分なりの表現を楽しみました。

すずき きょうせん
鈴木 響泉

趣くままの運筆を常に心がけ、線が変幻とし生彩を放つことを目指しています。遠い道のりは覚悟の上で、筆を持ち、悩み、いつか叶うことを夢見ることはこの上ない喜びです。

たかいち けんがい
高市 軋外

線深く、あこがれの大家の如き風格と動ぜぬ姿態をと臨んでみても御覧の通り。還暦の歳に相応しい書かどうか。これが今の実力。嗚呼……

たけなか せいこ
竹中 青琥

試作時、川蟬・翡翠はイメージはどんどん湧いて来ました。ところが「魚狗」はどうしても、誰もがその足を止めて眺める美しい姿とは結びつきません。本来の文字で制作しているうちに、こんな鳥に。わしはタカか？

たねや ばんじょう
種谷 萬城

戦国時代・三晋の篆書を基にした。カワセミが水面で羽ばたく華麗な姿をイメージし、線に軽やかな変化と躍動感を加えて『魚狗』の二文字で創作した。

とびた ちゅうこう
飛田 冲曠

印章を用いて澄んだ川に棲んでいる川蟬の爽やかな印象で書いてみました。

ながい そうし
長井 蒼之

川蟬 詩文で知る未見の鳥。辞苑に拠ると、雀より大形で、尾は短く嘴は鋭くて長大。体の上面は暗緑青色、背・腰は美しい空色で『空飛ぶ宝石』とも称される。想像を超える美鳥であるは確か。夢中夢の執筆であった。

なかむら そがく
中村 素岳

鮮やかな翡翠色の翼をもったきれいな川蟬を念頭に甲骨文で氣の向くままに筆を走らせた。

作家名

作品イメージ

ひろはた ちくしゅう
廣畑 筑州

篆書として比較的書きよいものとして魚狗をえらびました。

ふくだ じょうしゅう
福田 丞洲

現在都会では川蟬を見ることはほとんどない。小生は故郷の池と千葉の成田山の池で一度見ただけである。その姿や写真を見ながら書いてみました。

ふなもと ほううん
船本 芳雲

私の住する川辺にも贅沢なみづくろいの川蟬に出合う。川面を直角に飛びこむや小魚を口ばしに帰還する水辺の狩人でもある。川辺の木々を移動しながら水面をにらむ川蟬を表現しようと試みた。

みやおい ちやうこう
宮負 丁香

カワセミの可憐な美しいイメージとはほど遠い作品になりましたが、力強さを表現してみました。

やなぎ へきせん
柳 碧蘚

清流に生息する魚をスピーディーに捉える姿を想像して書いてみた。川蟬のそのシャープな美しさを求めて。

よしの たいきよ
吉野 大巨

「カワセミ」これをどの文字を当てて書くか。書を・筆を生活にしている者にとって、楽しい選択でした。川字は仲々他字と合わず、羽を二字にもハードルが高く、「魚狗」にしました。魚字を金文のどの時代にするか、それに犬部・句部をと、大変勉強になり、他の方の篆書作品を会場で学びます。

わたなべ れい
渡邊 麗

その姿は、青い宝石と呼ばれるカワセミ。環境のバロメーターともいわれ、澄んだ美しい清流に見られると言う。一瞬で急降下、水面に飛び込み、魚を捕らえる魚狗の図を筆に託して描いてみた。文字の向こう側に見える姿は、想像以上に美しいと感じていただけることを念じて制作に集中しました。

篆刻美術館

会期：令和4年 4月23日(土)～6月19日(日)